

市長が市内各地で開催されているお祭りに参加した感想について、政策秘書課職員と話をした内容です。

お祭り



市内の各所で行われているお祭りに、できる限りごあいさつに伺っています。今年は40度近い酷暑が続いていますが、皆さんの熱気はそれ以上で、どこのお祭りもととても盛り上がっていました。過疎化や高齢化により、地方のお祭りの存続が危ぶまれているといった話も聞きますが、本市にお

いては若者や子どもの参加が多く見受けられ、どこのお祭りも大にぎわいでした。

こうしたことを市の職員と話していたところ、その職員は結婚を機に引っ越しをして以来、10年以上お祭りに参加していなかったそうですが、最近になってお祭りに参加するようになったとのことでした。お祭りに参加するようになったきっかけを聞いたところ、「自治会の役員が順番で回ってきたため、渋々引き受けて清掃活動やお祭りの準備など参加した。それまでは地域への愛着のようなものを感じていなかったが、知り合いができたことで地域の一員になったように感じて、お祭りにも参加するようになった」とのことでした。

私が職員の話聞いて、改めて感じたのは、まちを作りあげるのは、条例でも道路でも施設でもなく、人とひとのつながりだということでした。これからの最も重要な課題は、人口減少です。本市でもいずれ人口減少が始まると、税収も労働人口も減ってしまうため、市役所の行う行政サービスも今までどおり行うことができなくなります。そんな時代には、市民の力で地域を支えるしかない、といつもお話しているのですが、そんな市民同士の支え合いも、近所づきあいも何もない状況では成り立ちません。職員が地域の活動に参加したことにより、知り合いができて地元へ愛着を持つようになったように、市民同士であい

さつし、関わり合って知り合いを増やし、「あの人は今、どうしているのだろう？」と気にかけることが、まちづくりの本質なのだと思います。



昔は、田植や屋根ふきといった一人では大変なことは、皆で協力して作業を行いました。協

力し合わないと生活ができなかったのです。そこで、お互い助け合えるよう地域の結束を強めるため、お祭りが開催され、皆で騒ぎ楽しむことで、生きていくために必要な人とひとの絆（きずな）を作り上げていったのです。これから人口が減少していくと、また一人では生きられない時代となり、皆で協力し合うための絆が改めて必要となることでしょう。

皆さんも是非、お祭りなどの地域の行事に参加していただき、周りの人とあいさつし、声を掛け合えるつながりを作って、地元への愛着を深めていただきたいと思います。そしてお互いのことを気にかけて、考えることがまちづくりの原点で、最初の一步なのだと思います。

～市長の話を聞いて～

7年前に娘が生まれたとき、名前をどうしようかと散々悩みました。この子が生きていく上で大切なものは…と考え抜いた結果、「ゆい」と名付けました。ゆいはすなわち「結」、市長が話されていた、田植や屋根ふき等を皆で助け合って行う共同作業のことです。人は一人では生きられないので、人を助け、人に助けられて、人と寄り添って生きていってほしいとの想いを込めて名付けました。そのおかげか娘は、小学生ながら私がついていけないような社交性を身につけてくれています。そんな私も自治会の活動を通じて、知り合いができて地元のお祭りに参加できるようになったように、ほんのちょっとしたきっかけが人との絆を作るのだと思います。